臨川小だより

７月号

令和４年７月　１日（金）
渋谷区立臨川小学校

学習活動の一層の充実に向けた支援　　校長　佐伯　孝司

６月２８日（火）、車いすラグビーの日本代表 池崎大輔選手と島川慎一選手をお迎えし、つくし学級の５・６年生と５年１・２組児童が、体験学習を行いました。車いすラグビー日本代表チームは、昨年の東京パラリンピックで銅メダル、この６月に行われた国際大会では金メダルを獲得し、現在世界ランキング１位のチームです。

はじめに、島川選手がタックルを見せてくださいました。車いすのスピードに息をのんだ次の瞬間、大きな音とともに相手のスタッフの方の車いすが一瞬宙に浮いたように跳ね上がり、児童からどよめきが起きました。その後、自分たちも実際に競技用の車椅子に乗って操作を体験しました。車いすの乗り降りにも補助が必要で、お互いに助け合っていました。基本的な動きができてくると、次は選手たちとしっぽ取りゲームで対戦しました。児童チーム対選手チームで、車いすの後ろにつけたタグを取り合います。ゲームを進めるにつれて、相手を後ろから追いかけるだけではなく、相手の動きを読んで回り込んだり、チームで連携して追い詰めたりするような動きが見られるようになりました。児童たちがゲームから戻って来ると「楽しかった」という声があちこちから響きました。「選手にタックルを受けたのが心に残った」「選手の動きが速すぎて追い付けない」などと近くの児童が話してくれました。最後に、児童だけで車いすラグビーのゲームをしました。パスをつないだりタックルで相手を止めたり、しっかりとゲームの形になっている様子に感心しました。

その後、児童から「試合で思うように動けなかった。選手の方々がそういうときに大切にしていることは？」という内容の質問が出ました。すると選手から「失敗しても、自分はできる、勝てるという気持ちをもつこと。そう自分に言い聞かせること。何事も挑戦する気持ちが大切」というお答えをいただきました。児童の感想には、選手たちへの憧れや尊敬、楽しかったという言葉があふれていました。「車いすのこと、パラスポーツのことなどをもっと知りたい」「試合は負けてしまったが自然に笑っているのが分かった」などという言葉がありました。東京２０２０は終わりましたが、「学校２０２０レガシー」として、共生・共助社会の形成を担う子供たちの育成を目指した取組を進めていきたいと思います。

車いすラグビー体験の前日、２７日（月）には、５・６年生のマーチングバンド活動の授業を行い、９名の学習ボランティアの方々にご支援をいただきました。地域学校協働活動推進員を通じて依頼し、PTA の協力を得て実現したものです。これまでコロナ禍で楽器の演奏が困難であった期間もあり、音の出し方やリズムの合わせ方など基礎的な技能の向上を児童自身が感じながら、より達成感と充実感をもって練習を進めることができるように、ボランティアの皆様にご支援をいただいているところです。それだけでなく、児童主体の活動になるよう応援してくださったり、児童の様子をお知らせいただくことでより効果的な練習の在り方を相談させていただいたり・・・とても大きなお力をいただいております。このような過程を経て、さらに児童主体の学習活動が充実していくことと思います。

本校では、授業の中で行う児童の学習活動に地域・保護者の皆様の力をお借りすることで、よりよい学習活動が実現できる場面がまだまだあると考えております。そこで、この地域学校協働活動推進員の制度を活用した取組を始めたところです。少しずつ成果と課題を確かめ、仕組みを整え、感染症の状況等も踏まえて、学習ボランティア活動の取組を着実に進めていきたいと考えております。児童が学校で多くの時間を過ごすのは、授業時間です。授業での学習活動の充実に今後も全教員で努めてまいります。そのうえで、車いすラグビー体験のように専門性を生かしてゲストティーチャーとしてご指導いただいたり、マーチングバンド活動のように学習ボランティアとしてできることをできるときにご支援いただいたり、様々な皆様のご支援によって、より充実した学習活動を実現できればと思います。